漢方学術講演会報告

ジユミハイドクトウ
各種湿疹に対する十味敗毒湯の治療効果**
Clinical Effect of Jumihaidokuto (Tsumura) on Eczema

木村 太 紀*	吉池 高 志*	坪井 良 治*
TAIKI KIMURA, M. D.	TAKASHI YOSHIKE, M. D.	RYOZI TSUBOI, M. D.
池谷 田 鶴子* ¹⁾	小川 秀 興* ²⁾	莊 国 康* ³⁾
TAZUKO IKEYA, M. D.	HIDEOKI OGAWA, M. D.	ZHAN GUO KANG, M. D.

各種の湿疹患者に対して十味敗毒湯^{ジユミハイドクトウ}を投与しその効果をみた。対象は29例であり、これらの患者に対し12週間十味敗毒湯を服用せしめた。効果発現は66%にみられた。なお効果発現迄の時期は平均5週であったが、効果の大なるもの程、発現時期は早かった。

ステロイド剤を服用している患者で効果がみられた患者5名においては、ステロイド剤の内服の中止又は減量が可能となった。

副作用はごく数例にみられたが重篤なものはみられなかった。

以上の結果より、十味敗毒湯は、湿疹に対し極めて有効であると思われる。

索引用語：十味敗毒湯，慢性湿疹，ステロイド療法

Key words：Jumihaidokuto, chronic eczema, corticosteroid therapy

はじめに

皮膚疾患中かなりの頻度を占める湿疹類の治療の主体は、ステロイド剤の外用である。現在、各種ステロイド剤と種々な工夫をこらした基剤が様々な組合せのもとに頻用されており、それらの疾患或は病像への時宜をえた適応法により、多くの湿疹類は、まずコントロールされている。しかし乍ら、各種皮膚疾患の治療上、長期にわたるステロイド剤からの離脱が困難な場合や、ステロイド剤による副作用も問題となる場合が少なくない。この様な状況下で、最近、漢方薬の適応が再認識

されつつある。我々は最近、十味敗毒湯^{ジユミハイドクトウ}が主として、湿疹類の治療の補助薬剤として、特にステロイドからの離脱上有効であるとの結果を得たので、その詳細について報告する。

対 象

昭和59年3月より、昭和59年12月迄に、当皮膚科で加療中か又は、新しく受診した患者で、西洋医学の治療によく反応しなかった症例29例を対象とした。内訳は、尋常性湿疹19例、脂漏性湿疹2例、貨幣状湿疹2例、アトピー性皮膚炎2例、皮脂欠乏性湿疹4例である。

使用薬剤

ツムラ十味敗毒湯エキス顆粒を使用した。この成分は表1に示すが、桔梗^{キキョウ}が、その成分のサポニンにより排膿効果を示し、甘草^{カンゾウ}は、他薬との併用による増強作用を有し、柴胡^{サイコ}は鎮痛解熱効果を有

* 順天堂大学医学部皮膚科学教室 *¹⁾講師

*²⁾教授 *³⁾協力研究員

Department of Dermatology, Juntendo University School of Medicine, Tokyo, Japan

* * 第1回順天堂大学漢方学術講演(Sept. 1, 1985)
(June 14, 1985受付)

表1 ツムラ十味敗毒湯エキス顆粒
Tsumura Jumihaidokuto

一般名		
十味敗毒湯 ジュウミハイドクトウ		
組 成		
日局キキョウ	(桔梗)	3.0 g
日局サイコ	(柴胡)	3.0 g
日局センキュウ	(川芎)	3.0 g
日局ブクリョウ	(茯苓)	3.0 g
日局ボウフウ	(防風)	1.5 g
日局カンゾウ	(甘草)	1.0 g
日局ケイガイ	(荊芥)	1.0 g
日局ショウキョウ	(生姜)	1.0 g
ボクソク	(樸椒)	3.0 g
ドクカツ	(独活)	1.5 g
本品5.0g 中には、上記の割合の混合生薬より得た乾燥エキス粉末2.0g を含有する。		

し、紅斑消除が期待される。ケイガイ ボウフウ ドツカツ
 荊芥、防風、独活は、
 祛風上痒効果を有する。ボクソク センキユウ
 樸椒は収れん剤、川芎、
 ショウキョウ
 生 姜は、補血剤である。以上十種の生薬が配合さ
 れて、皮膚の発赤、腫張、瘙痒などを鎮め、化膿
 性炎症を抑える効果を有する。

投与量と投与法

1 日量7.5g を 3 回食前に服用させる。投与期間は12週を目標とした。なお、服用開始前にステロイド軟膏、ステロイド内服剤、抗ヒスタミン剤等の投与をうけていた患者にはひき続き使用を許可した。ただし併用薬は、十味敗毒湯を使用前に、少なくとも 4 週間使用させた症例を集計した。観察は、2 週間毎に行い、癢痒、潮紅、丘疹、水疱、びらん、鱗屑、浸潤、肥厚のそれぞれの程度を、5 段階に分けて、観察し、投与前のそれと比較し、それにより改善度を 5 段階に判定した。更に皮疹改善度とあわせ、副作用の有無、ステロイドよりの離脱ができたか等を総合的に評価した。

臨床成績

対象症例は29例で、その内脱落例が4例である。脱落例4例のうち、1例(No.26)は8週迄、2例(No. 27, 28)は4週迄経過を追跡しえた(表2)。他の症例は、12週にわたり投与を続けることができた。表に示す如く、“極めて有用”は3例(12%)、“有用”は6例(23%)、“やや有用”

表2 十味敗毒湯投与臨床成績

症例	年齢	性別	体重	身長	病名	重症度	副作用	効果
1	65	F	48	152	皮脂欠乏性湿疹	中	なし	不変
2	45	F	49	155	"	重	"	有用
3	84	M	55	162	"	中	"	極めて有用
4	85	F	42	155	"	"	"	不変
5	18	F	43	158	貨幣状湿疹	重	上腹部痛	"
6	47	F	69	177	"	中	なし	"
7	16	M	58	163	アトピー性皮膚炎	重	"	やや有用
8	29	M	59	169	"	中	"	不変
9	23	F	50	162	慢性湿疹	中	"	やや有用
10	60	M	55	165	"	"	"	"
11	66	F	45	152	"	"	"	有用
12	53	F	47	153	"	重	蕁麻疹(?)	不変
13	83	F	40	158	"	"	なし	極めて有用
14	69	F	71	152	"	中	"	やや有用
15	44	M	72	171	"	重	"	やや有用

表3 疾患別臨床成績

	不 変	やや有用	有 用	極めて有用
皮脂欠乏性湿疹	50% (2/4)	0 % (0/4)	25% (1/4)	25% (1/4)
貨幣状湿疹	100% (2/2)	0 % (0/2)	0 % (0/2)	0 % (0/2)
アトピー性皮膚炎	50% (1/2)	50% (1/2)	0 % (0/2)	0 % (0/2)
慢 性 湿 疹	23% (4/18)	39% (7/18)	27% (5/18)	11% (2/18)
計	34%	31%	23%	12%

は8例(31%)，“不変”は9例(34%)であった。有用であったものは総計66%であった。疾患別にみると、皮脂欠乏性湿疹では、有用が2例(50%)，貨幣状湿疹では、有用例なく，アトピー性皮膚炎では有用例1例(50%)，慢性湿疹では有用が14例(77%)であった。これらの結果を表3に示す。体格によって症例を分けて見ると，やせ型では有用が4/6(66%)，中等度体格では有用が11/16(68%)，肥満体では3/3(100%)であり，やせ型では効果が少ない。

表4は治療経過を示したもので，治療効果がみられる時期は平均5週目であり，“やや有用”群では6週頃，“有用”群では4週頃，“極めて有用”群は2週頃であり，効果が大きい群では，効果出現の時期も早い。また副腎皮質ホルモンを内服している患者では，ステロイド剤の減量，離脱を試みたが，表4に示す如く，3例が減量に2例が中止に成功している。

副 作 用

十味敗毒湯は，長期連用により，時に，偽アルドステロン症がみられるという。我々の経験では，副作用としては，上腹部痛1例(症例5)，下痢1例(症例17)，蕁麻疹2例(症例12, 19)をみた。血液検査にて異常を示した例はみられなかった。蕁麻疹の2例は，過去にその既応はみとめられないが，真の副作用か否かは定かではない。

表4 治療経過表

症 例	効 果	臨 床 経 過 2週 4週 6週 8週 10週 12週						ステロイド内服 薬の減量，離脱
7	やや有用	—	—	—	+	+	+	
9	〃	—	—	—	+	—	+	セレスタミン 2T→2T
10	〃	—	+	+	+	+	+	
14	〃	—	+	+	+	+	+	セレスタミン 2T→1T
15	〃	—	—	+	+	+	—	セレスタミン 2T→2T
18	〃	—	+	+	+	+	+	
20	〃	—	+	+	+	—	+	
23	〃	—	—	—	—	+	+	
2	有 用	+	+	+	+	+	+	セレスタミン 2T→0
11	〃	+	+	+	+	+	+	
21	〃	—	—	+	+	+	+	
24	〃	×	—	+	+	+	—	
25	〃	—	+	+	+	+	+	
26	〃	—	+	+	+	+	+	セレスタミン 2T→0
3	極めて有用	+	+	+	—	+	+	
13	〃	+	+	+	+	+	+	
22	〃	+	+	+	+	+	+	

++：著明改善，+：改善，+：やや改善
—：不変，×：悪化

考 按

近年，漢方療法が注目をあびているが，漢方による治療は，元来“証”にもとづいて，処方していくという方法をとる。証があわなければ，治癒は望めないことになる。しかし漢方の素養のない医師にとって証を正しく把握することは容易ではない。そこで最近では，西洋医学流に証によらず，病名により投与を行っていく方法もとられる様になった。

今回使用した十味敗毒湯は，体力が中等度以上で患部が乾燥し，分泌が少ない湿疹，蕁麻疹に使用される。

中井(太)らは，蕁麻疹に対し，十味敗毒湯を使用し，有効率66%と報告している。彼等の報告でも効果発現には，1～2週を要している。

副作用に関しては，中井(太)らは嘔気が26例

中1例, 大塚(敬)は筋肉痛の生ずる場合があると述べている。我々の場合も, 副作用の発現は前述した様に4例にみられたが, 重篤なものはみられなかった。

副作用の少なさと, 高い効果発現率からみて, 十味敗毒湯は大変有用であると思われる。

文 献

1. AJD 漢方研究会 張明澄監修: 中国漢方事典, 第一通社, 1976
2. 中井太一, 他: 蕁麻疹に対する十味敗毒湯の治療効果, 臨床と研究, 59: 123~125, 1981
3. 大塚敬節: 症候による漢方治療の実際, 南山堂, 1972
4. 坂口弘: 漢方処方副作用, 漢方の臨床, 19: 326~330, 1972
5. 藤井健: 漢方の副作用について, 漢方の臨床, 19: 127~129, 1972

Summary

Clinical Effect of Jumihaidokuto(Tsumura) on Eczema

We used Jumihaidokuto (Tsumura) for the patients of several kinds of eczema. The number of patients is 29: chronic eczema 21, atopic dermatitis 2, annular eczema 2, xerotic eczema 4. In 13 patients, improvements were observed, and further more, in 5 patients oral administration of corticosteroid could be stopped or the dosis of it could be reduced.

The occurrence of side effects is very rare, (epigastralgia 1, diarrhea 1, urticaria 2). We think that Jumihaidokuto is very effective for the dermatitis patients.

Key words: Jumihaidokuto, chronic eczema, cortico steroid therapy

TAIKI KIMURA, M. D., TAKASHI YOSHIIKE, M. D.,
RYOZI TSUBOI, M. D., TAZUKO IKEYA, M. D.,
HIDEOKI OGAWA, M. D., ZHAN GUO KANG, M. D.

*Department of Dermatology, Juntendo University
School of Medicine, Tokyo, Japan*